第1章　知識とはなにか？

knowledge3.indd　11　2017/04/07　21:09:45

まずは「知識とはなにか」ということから始めようと思う。「知識は理解された情報だ」とか「知識は集団で共有されることもある」などと書けば、「読みづらい」「つまらない」と言われるに決まっている。でもそれは覚悟の上で、「知識とはなにか」ということを書く。それをしなければ、残りの章を書くことができない。

雑然と存在するデータのなかから都合よく選び取ったものが情報なのだとすれば、情報はそれを選び取る人の立場や意見を大きく反映したものになる。人が情報を選び取り、組み合わせ、伝えるとき、情報は自分や自分が属している集団のもの。事実とか真実とか、科学的・客観的と言われているような情報も、他の集団に属している人たちには、信じてもらえない。

知識は、社会が共有する価値に、そしてひとりひとりの考えに、大きく依存する。その依存度は、情報の比ではない。そもそも知識は、私たちの頭のなかにあり、なかなか外には出てこない。知識は社会の鏡だというが、一人一人が生きてきた証だと言ったほうがいいのかもしれない。

情報が人によって歪められたものだというのなら、知識は人によって壊されたもの。情報が嘘でいっぱいだというのなら、知識は大嘘ばかり。知識は情報よりも、ずっと私たちに近い。

知識はとても頼りないものだから、「知識とはなにか」ということについて考えても、意味はないのかもしれない。それでもこの章では、「知識とはなにか」ということを考える。

knowledge3.indd 12 2017/04/07 21:09:45

1・1　データ、情報、知識、知恵

『情報』という本のなかに書いたが、私は「データ・情報・知識・知恵」という4層モデルを基に、いろいろなことを考えている。

・データ：意味のない事象。ビット、数字、文字などで表される。
・情報　：集められ、整理されたデータ。伝えられ、利用される。
・知識　：消化され理解された情報。集団で共有される。
・知恵　：広く受け入れられた知識。人類で共有される。

データが集められ整理されたのが情報。情報が消化され理解されたのが知識。知識のうち全人類に受け入れられるようなものが知恵。そういうモデルだ。ジェイムズ・グリック(James Gleick)が言っているように、情報は知識ではなく、知識は知恵ではない。そしてデータは情報ではない。

さらに言えば、

・蓄積されず保存されないデータは、すぐ消える、
・伝えられず見つからない情報は、ないに等しい、
・生かされず使われない知識には、意味がない、
・生きる力にならない知恵は、知恵ではない、

とも思っている。

knowledge3.indd 13　2017/04/07 21:09:46

４層モデルについては、『情報』という本のなかに詳しく書いたのでここで繰り返すことはしないが、私がデータ、情報、知識、知恵といった言葉を私なりに定義して使っているということについては、ただ笑って許していただければと思う。もとより、私が使っている定義が正しいなどと言うつもりもなく、４層モデルについて議論する気はない。

知、知能、知性、諜報といった言葉も曖昧のままにしておくつもりはない。これらの言葉についても、私なりの使い方があることを許していただきたい。

データが知識に与えるもの

ケンブリッジ大学出版局（Cambridge University Press）が「知識はもう、書棚にはない（Knowledge is no longer shelved.）」とウェブサイトに書いたのは、もう数年前のこと。ケンブリッジ学術雑誌ディジタル・アーカイブ（The Cambridge Journals Digital Archive）には１６０以上の学術雑誌がアーカイブされているという。「えっ、それだけ？」と思うかもしれないが、ページ数にすると３００万以上、リンクされたリファレンスが８００万以上と聞けば、「それだけ？」などとは言えないだろう。「知識はより見やすく、探しやすくなってきている」というケンブリッジ大学出版局の文章は、なんだか誇らしげで、まぶしい。

知識が学術雑誌のなかにあるという考え方は、学術・研究・教育といった分野で働いている人たちに共通している。知識は結局のところ一人一人の頭のなかにあり、たとえそれをどんなにうまく紙の上に表現したとしても、読んだ人が書いた人の頭のなかを覗けるわけもなく、書いたことを１００％わかるはずもない。そういう意味では、論文のなかの文字も数字も図もただの情報でしかなく、知識とはいえない。

knowledge3.indd 14 2017/04/07 21:09:46

それでも私たちは、「書かれたことは、読めば理解できる」という幻想のもと、「誰かの知識」が「書かれた情報」を経由して「他の誰かの知識」になるのだと信じている。それはなぜか。

ひとつには、書かれたもののなかに、知識ではなく、情報でもなく、データがあるためではないか。書いた人が客観的な事実だと信じていることを、客観的な事実として書く。そのことに成功していれば、読む人はそれを客観的な事実として受け入れる。そしてそれは、読んだ人の知識になる。

ほかの理由として、読む人の事情というものがある。試験を受ける場合には、理解はしていなくても、正解が選べたり書けたりすればいい。会議に出る場合には、発言の機会がないのであれば、理解をしたような顔をしていればいい。下手に理解したりすると正解が選べなかったり会議を混乱させたりするから、伝わってはいない知識でも伝わったことにするほうがいいこともある。

また、知識を共有しているという幻想に浸りたいとか、固い絆で結ばれていると思いたいとか、そんな場合もある。あなたの知識は間違いなく私に伝わりましたと言って誰かを安心させたいなんていうこともあるだろう。

でも、どんな場合でも、「書かれたことは、読めば理解できる」というのは、ただの幻想でしかない。「誰かの知識」が「書かれた情報」を経由して「他の誰かの知識」になるなどということも、まずない。書いた人が客観的な事実として提示したことが、本当に客観的な事実かどうかは、読んだ人にはわからない。読んだ人がそのことを確かめる術を持っていることは、ほとんどない。

私たちが知識だと思っているものの多くは、受け売りでしかない。そして自分の知識が正しいかどうかを確かめることは、誰にもできない。でもそれでは、あまりにも不安だ。「誰々がそう言っていたから」とか「そこにそう書いてあったから」というような理由だけでは満足できないとき、もっともらしいデータの存在は

knowledge3.indd 15 2017/04/07 21:09:46

本当に力強い。助かるし不安が消える。

データが正しいかどうかは問題ではない。データが付いているおかげで、自分が得た知識が正しいのだと思える。それが大事なのだ。データが知識に与えるもの。それは知識を信じる力なのではないだろうか。

知識かデータか

プラトン（Plato）の言葉として、「良い決定は数字にではなく、知識に基づいたものだ」という文が伝わっている。

数字は数字でしかない。その数字が客観的な事実を表すものだとしても、それはただの数字でしかないし、それはただの事実でしかない。なにか大事なことを決めるのに、ただの数字やただの事実などで決めてもいいのか。決定する人の知識にすらなっていないただの数字や事実に、身を委ねてもいいのか。

データには、それが文字であろうが数字であろうが、画像であろうが映像であろうが、音声であろうが位置情報であろうが、客観的な事実であろうが作られた偽りであろうが、確かめようがないという一点で、全幅の信頼を置いてはならない。

コンピュータを使えば、どんなデータも歪めることができる。後ろを歩いていた人が前を歩いていたり、いたはずの人がいなくなっていたり、文章が変わっていたり、私たちは実際にその歪みを見てきた。データはもはや、信じられるものではない。

私たちは「知識が、いい加減なものだ」ということを良く知っている。でも知識は自分の頭のなかにある。だから、信じてもいい。自分の頭のなかにある知識を信じないで、何を信じるというのだ。

knowledge3.indd 16 2017/04/07 21:09:46

自分で納得のいく知識をたくさん持つことで、それを信じる。信じた上で、良い決断をする。それが良い毎日をすごす基になる。そう思うと、「どんな知識も疎かにできない」という気がしてくる。

情報が知識になるとき

情報は伝えられても、知識にはならない。理解されてはじめて、知識になる。
情報を伝えた人の知識と、情報を伝えられた人の知識が、同じである必要はない。
情報を理解しようとして考えて、その結果の知識なら、ひとりひとり違うのは、あたりまえ。
情報が知識になるとき、情報ははじめて色を持ち、考えた分だけ光り輝く。
知識はだから、間違っていようと、悪かろうと、持ち主のもの。その人そのもの。
知識を否定することは、その人を否定すること。そう思えば、どんな知識も尊重したくなる。

knowledge3.indd 17 2017/04/07 21:09:46

1・2　知識という言葉

知識という言葉は、様々に用いられる。もともと言葉の定義が厳密でない日本では、言葉の意味についての合意なしで、抽象的な概念が一人歩きをする。厳密な定義をしようにも、定義をするための言葉がない。どんな言葉もあいまいで、定義どころか、ちょっとした説明すらできない。すべてがおおらかなのだ。「この言葉にはこんな意味もある」、「この言葉はこんな使われ方もされている」などと言って、いい加減さは広がってゆく。

おおらかで曖昧でいい加減なのは決して悪いことではないけれど、知識を考えるときには多少の整理が必要になる。知識という言葉がどのように使われているかを見ていけば、知識について考えてゆくことができるかもしれない。

知識はデータ・情報・知識・知恵の総称？

富士通がウェブサイト上でいろいろなことを説明してくれている。題して『本質博士の仕事塾』。「仕事の本質を明確に定義して皆様のビジネス力の基盤作りにお役に立ちたい」と書いてある。

本質博士は、データを「加工前の原材料」、情報を「メッセージ性を持ったもの」、知識は「価値を生み出

knowledge3.indd 18 2017/04/07 21:09:46

すための材料」、そして「知恵」は「価値を創造する思考や行動となるもの」だという。そして、「ナレッジの理解」として、『ナレッジ』とは個人や組織が持っている『データ』『情報』『知識』さらには『知恵』といった『知的資産』の総称である」という。

うん？　なんだか変だ。少し書き直してみよう。

「ナレッジ（knowledge）」とは個人や組織が持っている「データ（data）」「情報（information）」「知識（knowledge）」さらには「知恵（wisdom）」といった「知的資産（intellectual property）」の総称である。

やっぱり変だ。「knowledge とは data, information, knowledge, wisdom といった intellectual property の総称である」というのは、やっぱりおかしい。「川とは、山、海、川、森といったものの総称である」や「ギターとはキーボード、ドラム、ギター、ベースといった楽器の総称である」がおかしくないはずはない。富士通だろうがなんだろうが、おかしいものはおかしい。

本質博士は「ビジネスの世界で、データと情報をきちんと使い分けている人はすくないのです」と言う。でもその本質博士が、データと情報をきちんと使い分けているとは思えない。知識や知恵をきちんと使い分けているとも思えない。

できることなら、「ナレッジ」と「知識」の違いは何なのかを。本質博士に聞いてみたい。

・「ナレッジ」とは個人や組織が持っている「データ」「情報」「知識」「知恵」の総称です。

・「ナレッジ」と「知識」とは違うのです。

そんな説明をするのだろうか。

本質博士だけではなく、日本では一般に「情報」「インフォメーション」「知識」「ナレッジ」「知」といった言葉がそれぞれ勝手に定義され使われている。誰もその状況がおかしいとは思わない。

knowledge3.indd 19 2017/04/07 21:09:46

辞書の説明

日本語には「データ」「情報」「知識」「知恵」という言葉のほかに「知能」「知性」「知」というような言葉もある。それぞれ違う意味で使われているかと思えば、同じ意味で使われていることもあって、まぎらわしいことこの上ない。言葉と言葉の区別は厳密ではなく、入れ替えが可能な場合も多い。要するになにもかもが曖昧なのだ。

アルクの『英辞郎 on the WEB』はとても便利なオンライン辞書で、長いあいだお世話になってきているが、その辞書に「知識」と入れると、訳として「information」と「knowledge」とが出てくる。「情報」と入れても、「information」と「knowledge」が出る。「knowledge」の訳には「情報」と「知識」が並び、「information」の訳にも「情報」と「知識」が並ぶ。これを論理的に考えれば、「情報」と「知識」は同じ言葉だということになる。

それだけではない。「information」は「データ」とも訳され、「knowledge」は「知恵」とも訳される。「データ」、「情報」、「知識」、「知恵」の四つの言葉が一緒くたにされている。

「諜報」は「information」。「information」は「知識」。「知識」は「idea」。「knowledge」は「自覚」。「intelligence」は「知性」。

「知性」は「understanding」。「知能」は「mental capacity」。これがパズルだとしたら、絶対に解けない。

学校で英語ができなかったのは単に私が勉強をしなかったからなのだが、それはそれとして、こんな非論理的なことを習って良い成績をとっていた優等生たちの頭のなかは、いったいどんなふうになっているのだろう。

knowledge3.indd 20 2017/04/07 21:09:46

明治時代に作られた言葉

なぜこんな不思議なことになったのかといえば、それは歴史のせいであり、日本人の気質のせいであり、日本の社会のせいであり、日本の学問のせいであり、翻訳の難しさのせいでもある。とにかく日本語の言葉は、曖昧に使われている。

そのなかでも特に、明治時代に作られた数々の言葉は、日本語の曖昧さの大きな原因になっている。それらの言葉は、そしてその使われ方は、私たちの現在の生活にも大きな影響を与え続け、「わかっているつもり」という私たちを生み出し続けている。

福田眞人は、「『愛』という言葉は、かつて仏教用語であって、人間相互の感情を表象する言葉ではなかった」という。日本人の多くは、明治の初めに出た中村正直訳『西国立志編』で「恋愛」なるものを認識し、二葉亭四迷が翻訳・創作した小説によって「ラヴ」と「恋」の違いを知った。

江戸時代までの、「情」「色」「恋」などに比べ、「恋愛」は洗練されていて、洋風な感じがする。と同時に、明治時代の人たちには、新しく馴染まない言葉であるがゆえに、その感情を正確には理解できなかった。そして今日でもなお、「あなたを愛する」という表現には、多くの日本人が違和感を持つ。

そのあたりの事情を、飛田良文がうまく説明している。明治時代の翻訳は、「山」や「川」のように西洋語の意味と日本語の意味とが一対一に対応するものと、対応しないものとがあったというのだ。対応しないというのは、その西洋語の概念が日本語にはなかったということで、明治時代に作られた言葉のほとんどがこれにあたる。

新造語（「個人」「科学」など）、借用語（「電報」「恋愛」など）、転用語（「権利」「常識」など）というような分類があるが、どれも日本語にはなかった概念に漢字を当てたということでは同じだ。

knowledge3.indd 21 2017/04/07 21:09:46

この本のなかでの知識という言葉

いずれにしても、明治時代のどさくさのなかで、ドイツ語の「Informationen」や英語の「information」には「情報」という二文字の漢字が当てられ、ドイツ語の「Wissen」や英語の「knowledge」には「知識」が当てられたということは、確かなようだ。

そう考えれば、「知識」は英語の「knowledge」のこととしても、おかしくもなんともない。

知識のことを考えるにあたり、知識という言葉の意味を曖昧なままにしておいては、なにを書いているのかわからなくなる。なので、この本のなかでは、「知識」は英語の「knowledge」のこと、ドイツ語の「Wissen」のこととして話を進めて行こうと思う。

仏教での知識

そうはいっても日本では長いあいだ、「知識」は「knowledge」を意味しなかった。例えば7〜8世紀には、仏教の信徒の財物及び労力の寄進を知識と言った。寄進をし、造寺や造仏などの事業に進んで参画した信徒のことも知識と呼んだようだ。

現在でも、あちらこちらに、知識によって建立された寺の痕跡が残っている。実際、河内や信濃には、今でも「知識寺（智識寺）」という、そのものずばりの名前を持つ寺の跡があり、観光客を集めている。

また、知識の集まりを知識結と言った。例えば行基は、知識結を率いたリーダーだった。行基の功績として、寺を建てたとか、水路を作ったとか、橋を架けたとか、貧民救済施設を置いたとか言われているが、そのひとつひとつが知識であるとすればわかりやすい。そして行基のことを「知識結を組織した人」と考えれ

knowledge3.indd 22 2017/04/07 21:09:46

ば納得がいく。

そうは言っても、7～8世紀のことはすべてが闇のなかにあり、読んだことが本当なのかどうか、なにを信じたらいいのかは、誰にもわからない。歴史好きの人たちは歴史をロマンだと言い、勝手なことを言い続ける。

学校では十七条憲法は604年に聖徳太子が書いたものだと教わり、その後それは720年に日本書紀を書いた人の創作だったのだと言われる。そもそも日本書紀は当時の権力者を正当化するために書かれたものだと解説してくれる人もいる。

歴史の改ざんや創作は、なにも7～8世紀の日本でだけなされたわけではない。世界中のどの場所でも、どの時代においても、歴史は都合よく作られてきた。

だから、知識が仏教の信徒の寄進のことだと書いてみても、それが事実なのかは確かめようがない。ここではただ、今私たちが使っている知識という言葉は、明治時代に西欧の言葉を訳すなかで作られた言葉であって、江戸時代まで使われていた知識という言葉とは違うということを指摘するに留めたい。

仏教での知ると識る

ある日、サーチをしていて、「なべ」という人の『nabeodesuyo』というブログの『論理的思考能力とは？』という記事に行きついた。そこには、「論理性があるとは論理が含まれた形での知識をどれだけ持っているかであって、論理的思考能力というところにだけ焦点を当ててもあまり見えることは多くない」と書いてある。

knowledge3.indd 23 2017/04/07 21:09:46

アカデミックな人たちの文章は、いつもとても難しく、とっつきにくいのだけれど、そういう記事に食いつく人は結構いるもので、しかも、食いついて来る人たちのコメントはその多くが、とても面白いのだ。

その「なべ」という人の記事についてもいろいろ面白いコメントが載っていて、そのなかでも「秋」という人のコメントは、とても興味深いものだった。「知識という言葉は仏教用語で、『知』と『識』は別々のものです」と言う。

「なべ」という人が「知識」と言っているのは、仏教用語で言うところの「知」の方で、「識」は「知」を論理につないでいく役割を担うと言うのだ。「識」は論理的思考そのものではなく、筋道を立てていく働きをするもの。「知」がなければ「識」はなく、「識」のない「知」はなんの役にも立たない。

孔子の「学而不思則罔、思而不学則殆」は、学ぶだけで思わなければ「くらい」、思うだけで学ばなければ「あやうい」と言ったそうだが、そのなかの「学」を「知」、「思」を「識」と考えれば、「秋」という人の言うことが良くわかる。知るだけで識らなければ、わかったことにはならない。識るだけで知らなければ、ひとりよがりの考えでしかない。「知」と「識」には、厳密にいえば、そういう違いがあるのだろう。

もっとも私たちの多くは、そんな違いなど気にしてはいない。実際、『ウェブリオ（Weblio）辞書』の『日本語表現辞典』は、「識る」について、「見分ける、知識を得る、認識する、などの意味の表現」としながらも、「現代的な表現としては『知る』とほぼ同義で用いられることが多く、単に『知る』と書くことが多い」と説明している。

学んで知り、考えて識る。その程度の違いはあってもいいような気がする。

knowledge3.indd 24 2017/04/07 21:09:46

知と智

河内の智識寺のことを調べるなかで、はてこれは知識寺なのか智識寺なのかという素朴な疑問を持った。さらに、「knowledge」の訳は、知識なのか智識なのかという疑問も持った。

１９４６年に定められた「当用漢字」に「智」が入らなかったせいもあって、現在の日本ではほとんどの人が「知」と「智」を同じように使っている。でも、老子の第三十三章に「知人者智、自知者明」とあるように、「知」と「智」の使われ方は決して同じではない。「人を知る者は智、自ら知る者は明」と読めば、「知」という字は「知る」という動詞として使われ、「智」は「人を知る者」を、「明」は「自ら知る者」をそれぞれ形容しているということになる。そう読むことが正しいかどうかは別として、「知」という字と「智」という字は、明らかに違って使われている。

そうは言っても私に、そんな違いがわかるはずもなく、違いを気にする余裕もない。私は「知」と「智」を、そして「知識」と「智識」を、同じものとして扱うつもりでいる。そして人名以外はすべてを「知」と書き、「智識」ではなく「知識」と書く。「知」と「智」の違いは、私のなかには、ない。

フランスでの知識

インターネットで「Wissen beruht nicht auf der Wahrheit allein, sondern auf Fehler auch.」という引用文を見つけた。カール・ユング（Carl Jung）の言葉ということになっているが、本当にユングがそう言ったかどうかはわからない。「知識は真実のなかだけでなく、間違いのなかにもある」ということだが、「人は、正しいことからも間違ったことからも、知識を得る」というように理解する人もいる。

knowledge3.indd 25 2017/04/07 21:09:46

正しい情報を選び取りさえすれば、正しい知識が身に着く。それなら誰も苦労はしない。残念ながら知識はそんなに単純ではない。正しい情報を受け取っても間違った知識を身に着けてしまう人もいるし、反対に間違った情報が与えられても正しい知識を得る人だっている。

受け取った情報がどんな知識になるかは、情報の受け取り手がどんな人であるかにかかっている。そう考えれば、グスタフの言うことはよくわかる。

先程の文章がフランス語に翻訳されると、「La connaissance ne repose pas sur la vérité seule, mais sur une erreur aussi.」になる。ドイツ語の「知識（Wissen）」という言葉は「コネッサンス（connaissance）」と訳され、「サヴォワール（savoir）」にはならない。

ミシェル・フーコー（Michel Foucault）の『知の考古学（L'Archeologie du Savoir）』を英訳したA・M・. シェリダン・スミス（A.M. Sheridan Smith）は、英語版の『知の考古学（Archaeology of Knowledge）』のなかの脚注に、「英語の『知識（knowledge）』は仏訳されると『コネッサンス』か『サヴォワール』になるが、『コネッサンス』は生物学や経済学といった特定の分野の知識のこと、『サヴォワール』はより一般的な知識のことを言う」と書いている。専門知識としてのコネッサンスが集まって、全体としてサヴォワールになる。そんな感じなのだろう。

シェリダン・スミスは同時に、フーコーが「コネッサンス」と「サヴォワール」をどう使い分けていたかを短く紹介しているが、あまりにも理屈っぽく、しかも私が苦手とする主体と客体の関係とか主観と客観というような二項対立的な見方に立っているので、ここでは省略する。ここではただ、フーコーが本の題名に「サヴォワール」を使ったということだけを覚えておきたい。

まとめると、先程の「知識は真実のなかだけでなく、間違いのなかにもある」という文章のなかの「知識」

knowledge3.indd 26 2017/04/07 21:09:47

は「コネッサンス」と訳され、英語の「知識管理（knowledge management）」の「知識」も同じく「コネッサンス」と訳される。それなのに、フーコーの本の題名の「知識」は「サヴォワール」ということになる。

なにがなんだかわからないかもしれないが、まあどうでもいいことを書いている。「サヴォワール」は、特定の分野の知識である「コネッサンス」や身に着いた「スキル」が集まったもので、学ぶことや経験したことで得ることができるのだそうだ。

早い話、フランスには、「コネッサンス」と「サヴォワール」という、違う意味を持つ２つの単語があり、そのどちらもが「知識」と訳されると、そういうことなのだ。

私は仕方なく、誰かを知っていると言うときには「コネッサンス」を使い、そんなことは知っていると言うときには「サヴォワール」を使う。なぜそうしているのかは自分でもわからない。そしていろいろな場面で、自分の使い分けが間違っていると思い知らされる。ついこのあいだもフランスの本のなかで、「知識（connaissance）は力（pouvoir）の鍵、知恵（sagesse）の鍵」という文章にめぐり会った。孔子（Confucius）の言葉だそうだ。私はいまだに違いがわからずにいる。

knowledge3.indd　27　2017/04/07　21:09:47

1・3　知性、知能、ナレッジ、知

知識に関係しているような、でもよく考えると関係ないような、そんな言葉がある。知性、知能、ナレッジ、知。まぎらわしいこと、この上ない。そんな言葉について、少しだけ考えてみたい。

賢さとは、そして愚かさとは、どのようなことを言うのか。知性や知能があれば、賢いと言えるのか。なければ愚かなのだろうか。知識や知恵があれば、賢くなれるのか。疑問は果てしなく広がる。

知性、知能、そして知恵

トマス・ソーウェル（Thomas Sowell）は「知性（intellect）は知恵（wisdom）ではない」と言った。愚かな知性（unwise intellect）というものがあるというのだ。複雑な概念や考えを把握したり、それをうまく扱ったりする知的な能力が知性だとするなら、その純粋な知力が、間違った結論を導き出したり、愚かな行動につながったりするのは、不思議なことではない。

どんな概念も考えも完全ではなく、忘れられている要素や誤りがあるのだから、そこから導き出された結論や、そこから出てきた行動が、完全なわけがない。知性が間違っていたり愚かだったりすることがあるのは、ある意味当然なのだ。

概念や考えを把握したりうまく扱ったりするだけでなく、さまざまな要因をつなぎ合わせて考えてみたり、

knowledge3.indd　28　2017/04/07　21:09:47

経験的に考えて妥当かどうかをチェックしたりして出てくるものを、知能（intelligence）という。

知性と知能と、そして知識と経験と判断を合わせ、誰もが同じように理解することができるようなものを知恵（wisdom）という。当然のことながら、知恵などというものは世の中にそうはない。知恵の反対を愚かさ（foolishness）というが、愚かさを知恵だと思う世の中ほど危険なものはない。

インテリ

マックス・プール（Max Pool）がインテレクチュアル（intellectuals）のことをとても上手く書いている。インテレクチュアルの多くは、人を見下し、他の人の知能（intelligence）を喜ばず、理解しようとせず、認めたがらないという。

余談だが、インテレクチュアルと言われる人たちを日本語でどう表現したらいいのかわからず、今、辞書と格闘していた。辞書には「知識人」「有識者」「文化人」と書いてある。でも、知識人はテレビで知りもしないことをしゃべっている感じだし、有識者は政府の諮問委員会で官僚の作文を読んでいる感じだし、文化人はおカネでしか文化を見ることのできない人という感じで、どれも良い訳とは思えない。「知性がある人」「理性のある人」「聡明な人」などという説明もあるが、それはおかしい。インテレクチュアルの多くは専門のことしか知らず、知性とも理性とも縁がない。聡明でない人が多いのだ。インテレクチュアルの訳は、ほんとに難しい。

そんなことを考えていたら「インテリ」という言葉が浮かんできた。そして、山田洋次監督の『続・男はつらいよ』のことが思い出された。渥美清が演じる寅さんと、山崎努が演じる若い医者とが、クルマのなか

knowledge3.indd　29　2017/04/07　21:09:47

で言い争いをするシーン。医者が「その点については僕が謝る」と言うと、寅さんが「お！　てめえ、さしずめインテリだな」と受ける。あのシーンは忘れられない。寅さんは本当にインテリが嫌いだった。

寅さんの「さしずめインテリ」は、プールのインテレクチュアルに、とてもよく似ている。他の人たちの話を聞こうとせず、その知識から学ぼうともせず、その知恵を理解しようともしない。他の人たちが出した素晴らしい結果に対して、決して「良かった」と言わない。謙虚さもなければ感謝もない。あるのは、自分だけが素晴らしいのだという自惚れや競争原理。インテレクチュアルといわれる人たちのそんな側面を見てしまうと、寅さんでなくても「さしずめインテリ」と言いたくなる。

サッカーを見ていても、まるで「インテレクチュアル」のようなプレーヤーがいる。アカデミー出身で、サッカーのことをとてもよく知っている。でも、見ていてわくわくするのは、決して彼らではない。

わくわくするのは、アカデミーには行けなかった選手たち。アカデミーの費用が免除されたとしても、週に何回も練習場に送り迎えをしてくれる人が、そして週末には遠くの試合場まで連れて行ってくれる人がいなければ、アカデミーには行けない。行けなかった子供たちが、路上で夢中になってボールを追う。いわゆる、ストリート・フットボーラーだ。

「アカデミーのルール」と「路上のルール」とでは、何から何まで違う。芝生のグランドでコーチから習得したテクニックと、デコボコの路上で傷だらけになって身につけたスキルとが、同じわけはない。テクニックは邪魔なもののない理想的なところのもの、スキルは邪魔なものばかりの現実的なもの。理想的にはその両方を身に着けるのがいいのだけれど、路上や公園でボールを蹴ってはいけない日本からは、スキルを持ったプレーヤーは出てこない。

インテリが悪いとは言わない。ただ、わくわくしない。頭のいい人がそつなく仕事をし、結果を出す。そ

knowledge3.indd 30 2017/04/07 21:09:47

れは素晴らしいのかもしれないけれど、予定調和のつまらなさしか伝わってはこない。せっかく生きているのだから、ドキドキしないのはもったいない。

知性

ジョイ・ポール・ギルフォード（Joy Paul Guilford）が、知性の構造（Structure of Intellect）を三次元モデルで説明したのが６０年前。コンテント、プロダクト、オペレーションの要素の組み合わせが知性を形作っているという、わかりやすいような、それでいてわかりにくいモデルだ。

例えばコンテントのなかのシンボリックという要素と、プロダクトのなかのインプリケーションという要素と、オペレーションのなかのエバリュエーションという要素とが形作る能力というものがあるという。シンボリックというのは、ものごとを数字や文字に置き換える能力。インプリケーションというのは知識の予測とか、推論、帰結といったことを導き出す能力。そしてエバリュエーションというのは与えられた情報が正確かどうか判断する能力のこと。その３つが重なったら、与えられた概念を数字や文字に置き換えるのに、知識を総動員して予測なり推論なりを立てて、しかもそれが正確かどうか判断することができる能力ということになるのだろうか。一つを理解するのにも大変な時間を要するのだが、そんな組み合わせが１８０通りもあるというから驚きだ。

こんないい加減なものが、知性の構造を説明しているわけがない。だいいち、科学的でない。ジョン・ビッセル・キャロル（John Bissell Carroll）がそこのところを「ギルフォードのモデルは常軌を逸している」と言ってうまく書いている。「教科書などに載ることで、そのモデルが有効であり広く受け入れられたもの

knowledge3.indd 31 2017/04/07 21:09:47

だという印象を与えてしまっているが、それは明らかに間違っている」とか、「こんなモデルが注目を浴び続けるのは不愉快だ」と、容赦ない。

ギルフォードのモデルは、教育の分野以外では目にしなくなってきている。教育の分野でも消えてゆくのは時間の問題だろう。ただギルフォードは、知性が複雑なものだということを伝えるのには成功した。「知性は獲得できるものだという考えを広め、その後の知性の研究につなげただけでも、大変な功績だ」と言う人もいるが、私にはそうは思えない。

「知性とはなにか」という、一番大切なところをおろそかにするから、混乱が生じる。今ここで「知性とはなにか」ということを書こうとは思わないが、知性という言葉を口にするならば、それがどういうものなのか、考えたほうがいいのではないだろうか。

知能

ギルフォードが「知性(intellect)」という言葉を使って人間の能力を説明しようとしたように、レイモンド・キャッテル(Raymond Cattell)と、キャッテルの教え子のジョン・ホルン(John Horn)は、「知能(intelligence)」という言葉を使って人間の能力を説明しようとした。

一般的な知能(general intelligence)はお互いに作用し合ってまた違う知能を引き出すような100ぐらいの能力の集合体で、これらは大きく二つのグループに分けられると言う。一つは「流体的な能力」と呼ばれ、なにをしたらいいのかわからないときに使われる能力で、人間が本来持っているものとされる。もう一つは「結晶化された能力」と呼ばれ、教育や文化といった与えられる情報に依存し、語彙や知識といったも

knowledge3.indd 32 2017/04/07 21:09:47

ので示されるとされる。

同じ情報に接しても、同じ経験を積んでも、流動的な能力が高ければ、結晶化された能力が高くなると言う。そしてまた、いくら流動的な能力が高くても、情報に接したり経験を積んだりする環境にいなければ、結晶化された能力は低いままだとも言う。

同じ学校に通い、同じ教育を受けても、頭のいい人の成績は良くなり、頭の悪い人の成績は悪くなる。ただし、頭の良い人でも、授業に出なかったり勉強をしなかったりすれば、成績は良くはならない。

あれっ、これって、当たり前のことではないか。流体的な能力とか結晶化された能力とか言わなくても、みんなが知っていることではないか。

もっとも、キャッテルの言葉を借りれば、心理学は「誰でも知っていることを、誰も知らない言葉で説明するもの」なのだから、そういう当たり前のことを難しく説明するのは、おかしくもなんともないのだろう。

心理学の応用範囲は、教育から犯罪捜査まで多岐にわたり、実に広い。論文の数は多い。それだけでなく、論文の一つ一つが長く、しかも意見なのだか事実なのだかがはっきりしない。ある論文に対する反論が論文になるのだが、それもまた意見なのだか事実なのだかがはっきりしない。心理学は社会のなかではとても大事なものだけれど、そして私は心理学の本を読むのがとても好きだけれど、私が知性や知能のことを考えるときに、心理学はあまり役に立ちそうにない。

チャールズ・スピアマン（Charles Spearman）が一般的な知能としてg因子のことを言い出してから、もう１００年以上が経過した。そろそろスピアマンの呪縛から解き放たれて、違う幻想を追いかけてはどうだろうか。

knowledge3.indd 33 2017/04/07 21:09:47

医学から見た知能

脳の写真に色がついたものを見せられて、「このオレンジ色の部分が一般的な知性にとって重要な領域だ」などと言われると、判断能力のない私はそれをすぐに信じてしまう。心理学の話では懐疑的・批判的でいられたというのに、医学の話になった途端に盲進してしまうのはなぜだろう。「写真のなかのここの部分が、病変マッピングによって明らかになった一般的な知能のための分散型神経系で」などと言われると、「ああ、ついに医学もここまで進歩したのか」となる。なにもわかっていないのに、わかったつもりになっていたのだ。

これは実際に、ヤン・グレシャー（Jan Gläscher）の論文を前にしたときの、私の反応だ。「いくつかの脳の領域とそれらを結ぶ接続とが分散システムを形作り、その分散システムが一般的な知性にとってもっとも重要」だという文章を見たとき、私には疑うことはできなかった。

でもよく考えてみれば、グレシャーは、スピアマンからの１００年以上の心理学の流れを、医学的に示そうとしているのだ。数ある心理学の論文となんら変わらない。それなのに、脳の写真とか医学とかいうと信じてしまう。写真といっても測定結果をコンピュータで色づけしただけのもの。実際に撮影した写真ではない。

私のなかにもある科学への盲信には、滑稽なものが多い。

知能と知性

リチャード・ホフスタッター（Richard Hofstadter）が、「インテリジェンス（知能、intelligence）」と「インテレクト（知性、intellect）」の違いについて、面白いことを書いている。インテリジェンスとインテレ

knowledge3.indd 34 2017/04/07 21:09:47

クトの違いなんて、きっちり決めて使っている人はほとんどいないけれど、それでもみんな、だいたい同じような使い方をしているというのだ。

インテリジェンスはかなり狭い範囲の、すぐに答えの出る、予測可能な範囲で使用され、把握したり、巧みに扱ったり、調節したり、とにかく実用的だ。それに対し、インテレクトは批判的で、創造的で、瞑想的な側面を持ち、調べたり、熟考したり、思案したり、理論付けしたり、批判したり、想像したり、意味を探したりと、実用とはほど遠い。

インテリジェンスは答えのある問題に興味を示し、インテレクトは答えのない問題にも興味を示す。アーティフィシャル・インテリジェンス（人工知能、artificial intelligence）はあっても、アーティフィシャル・インテレクト（人工知性、artificial intellect）がないのは、コンピュータが答えのある問題にしか有効でないからだという。

インテリジェンスがあれば学力が高くなり、学力が高くなれば良い学歴がついてまわる。でもだからといって、良い学歴の人たちにインテレクトがあるとは限らない。答えのある問題について時間内に正しく答える能力と、答えのない問題について可能な解決策を示す能力は、同じではない。

学校で扱うのはそのほとんどが白黒のはっきりした問題だから、インテリジェンスがあれば答えが出る。でも実社会で出くわすのはグレーなものばかり。どれを選んでも正解とも言え、どれを選んでも不正解とも言える。そんなとき必要になるのがインテレクトなのだ。

インテレクトには「勘」とか、「度胸」とか、「いい加減さ」とかが含まれる。「たぶん」とか、「その場の空気を読む」といったことも、インテレクトの領分といえる。不思議なことに、インテレクトのある人は、インテリジェンスのある人より魅力的だ。

knowledge3.indd 35 2017/04/07 21:09:47

アーサー・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）は「自分で考える人の知的素養は、真実を写している。それはまるで、光と影が的確で、トーンがいつも同じで、完全に調和のとれた色をした絵のようだ。一方、学ぶだけで考えない人の知的素養は、調和とか繋がり、意味といったものを欠いている。それはまるでありとあらゆる色が使われ、その色が体系的に配置された大きなパレットのようだ」と言ったが、学ぶだけの人はインテリジェンスがあり、自分で考える人はインテレクトがあるということなのかもしれない。

これ以上「インテリジェンスとインテレクト」のことを書くのは控えようと思うのだが、ここでどうしても付け加えておきたいことがある。それはインテリジェンスという言葉の持つ多面性のことだ。意味合いとか語感とかがひとつではない。人によって、状況によって、時間と場所によって、意味が違うのだ。一例として、アリスター・マクファーレン（Alistair MacFarlane）の説明を書き加えておく。

マクファーレンによれば、インテリジェンスとは、私たちが生まれながらに持っている「情報をうまく使う能力」のことだという。問題を解決するために、どうやって情報を得るか、どうやって情報を自分のものとするか、どうやって情報を使うのか。変化し続ける状況のなかで、今まで起きなかったことや予測できないことに、どう対応していくのか。単に分析する能力ではなく、社会で実際に使える能力、うまくやっていく能力のことを言う。社会的なインテリジェンスや感情的なインテリジェンスが、特に重要だと言う。

このマクファーレンのインテリジェンスの意味は、先のホフスタッターのインテリジェンスの意味と、まったくと言っていいほど違う。言葉には人の数だけ意味があると言う。インテリジェンスやインテレクトのことを考えていると、そのことを痛感する。

knowledge3.indd 36 2017/04/07 21:09:47

日本での知性

さて日本ではどうなっているか。齋藤希史の知性の説明を引用してみたい。

知性は、知・情・意の枠組みのなかで、intellect あるいは intelligence などの翻訳語として登場した。認識や思考など、人間の知的活動全般を支える能力を指す。知性よりも先に普及した理性という語と同様に、「性」の字には、誰にでも生まれながらにそなわっている性質という方向づけがある。明治初期には「霊知」や「智力」といった候補もありながら、訳語としては知性が定着し、日常会話のなかにも使われるようになっていったのは、人間のもつ性質としての知性という考え方が共有されたからではないか。

読んでわかるとおり、intellect も intelligence も日本語になると知性なのだ。辞書を見て確かめてみよう。

intellect（知性、思考力、知力）
intelligence（知能、知性、知力、機密情報、諜報、諜報活動、諜報機関、知的存在、霊的存在）
知性（intellect, intellectual sinew, intellectuality, intelligence, mentality, mind, nous, sense, smarts, understanding）
知能（intellectual faculties, intellectual power, intelligence, mental ability, mental capacity, mental powers, mentality）

知性も知能も一緒。おおらかなものだとしか言いようがない。

knowledge3.indd 37 2017/04/07 21:09:47

繰り返しになるが、knowledge と information についても改めて確かめておこう。

knowledge（知っているということ、自覚、認識、情報、事実、知識、知恵、知見、学識、学問）
information（知識、学識、情報、諜報、資料、データ、事実、伝達、通達、電話番号案内、案内所、略式起訴）
知識（acquaintance, acquaintanceship, cognition, comprehension, education, equipment, experience, idea, information, intuition, ken, knowledge, learning, lesson, light, literacy, lore, savvy, scholarship, witting）
情報（advice, buzz, communication, information, input, item, knowledge, line, news, propaganda, scoop, witting）

知識も情報もみんな同じに使われ、みんな同じ意味を持っている。こんがらがるのは、当たり前だ。

専門知識と高い知能

フリントノート（FlintsNotes）のフリント・マグローリン（Flint McGlaughlin）は、専門知識と高い知能とを混同しないようにと言う。専門的な言葉や概念を前にすると私たちはただただすごいと思ってしまうけれど、多くの場合それはただの専門知識であって、高い知能なんかではない。専門分野のことに詳しい人であれば誰でも知っているようなことも、専門外の人たちには驚きに感じられる。数学がちりばめられたドキュメントを書いたからといって、その人が創造的な知能を持っているわけではない。

専門知識に惑わされて、それが高い知能であると勘違いしないようにしたい。

knowledge3.indd 38 2017/04/07 21:09:47

知恵

知恵というと、wisdom の翻訳だと思いがちだ。私は普段から「データ・情報・知識・知恵」なんて言っているから、なおさらだ。でも DIYADNY というひとがやっている「なんでも　大好き　ＤＩＹ」というサイトに、もっと素敵な知恵がたくさん並んでいた。せっかくなので、ここにも並べておく。

知恵袋（仲間の内でいちばん知恵のある人）
知恵者（知恵のすぐれている人）
知恵歯（親しらず歯のこと）
知恵が無い（工夫が足りない）
知恵が回る（よく気がつく。頭の回転がはやい。すぐにその場にふさわしい判断ができる）
知恵の持ち腐れ（すぐれた知恵を持っていながら、実際には活用できないこと）
知恵は小出しにせよ（知恵は一度に出し尽くしてしまわず、時に応じて出すのがよい）
知恵を借りる（よい考えや方法を教えてもらう）
知恵を絞る（懸命に考えてよい意見を出そうとする）
知恵を付ける（入れ知恵をする。そそのかす）
知恵比べ（知恵の優劣をきそいくらべること）
浅知恵（あさはかな考え）
悪知恵（悪い方面によく働く知恵。奸知）
さる知恵（気がきいているようで、実はあさはかな知恵。こざかしい知恵）

knowledge3.indd 39 2017/04/07 21:09:47

入れ知恵（他人に知恵をつけること。他人からつけられた知恵。多く、悪いことにいう）
知恵の輪（玩具。いろいろな形の金属の輪を組み合わせたり、解いたりして遊ぶもの）
知恵熱（乳児にみられる原因のわからない発熱）

どの言葉も素晴らしい。

knowledge3.indd 40 2017/04/07 21:09:47

1・4　知識のいろいろ

アルバート・アインシュタイン（Albert Einstein）は「知識は限られている」と言った。「想像力は知識より重要だ」とも言った。知識がなんなのか、いろいろな人が、いろいろなことを書いてきた。そのなかから、気になった文章を引用し、知識のいろいろについて考えてみようと思う。

知るということ

ビル・ワッターソン（Bill Watterson）が知識について、とても大事なことを書いている。「知れば知るほど、決めるのは難しくなる」というのだ。意思決定システムはより多くの情報を集めることで正しい判断を下していこうとするが、それとは逆のことを言っている。

情報が集まって来れば来るほど複雑さに気付き、白か黒かではないグレーの色合いが増してくる。はじめは単純で明確に思えたものが、いろいろな立場や見方を知るうちに揺らぐ。そして知識は麻痺する。

多くを知った人がそれでも賛成とかそれでも反対とか言うのも、なにも知らないで賛成とか反対とか言うのも、結局は同じ。多数決の原理は、知ることの難しさなど気にしない。

knowledge3.indd　41　2017/04/07　21:09:47

知ると理解する

ガールスカウトには、「知るは理解を、理解は愛を」という言葉がある。知るだけでは理解できない。理解するだけでは愛することはできない。理解しようとする、そして愛そうとする姿勢が大事なのだ。そんな説明を聞いたことがある。

なんとなくキリスト教の匂いがするこの言葉からは、努力をすればわかり合える、いつかは愛し合えるという、明るい楽観主義が感じられる。

私たちは、どれだけ説明してもわからないということを何度も経験し、決して理解し合えないという現実をいやというほど見てきた。そして、愛という幻想は必ずしも双方向ではないということを繰り返し味わってきた。

そしてガールスカウトでない私は、「知るということが孤独な作業だ」ということを、「理解するということは分かち合えない」ということを、そして「愛するということに期待を持ってはいけない」ということを、いろいろな言葉を使って書いている。

「知るは理解を、理解は愛を」は、ガールスカウトにはいいかもしれないが、私が生きてきた世界とはあまりにも違いすぎる。

「知るは理解を、理解は愛を」という言葉を口にして人道援助の活動をしている人たちがいるが、私には眩しすぎる。というか、私はそんな人たちとは関わり合いを持ちたいとは思わない。

ティク・ナット・ハン（Thích Nhất Hạnh）の言葉は心に突き刺さる。「自分自身でいれば、人は美しい」、「自分で自分を受け入れることができれば、人に受け入れられなくても、それでいい」、「喜びは微笑をもたらすけれど、微笑が喜びをもたらすこともある」、「愛された人が自由を感じるようなやり方で愛しなさい」といっ

knowledge3.indd 42 2017/04/07 21:09:48

た言葉を静かなところで聞くと、穏やかな気分になる。たくさんの言葉のなかには知識に関するものもある。

「理解するためには、知識を投げ捨てなさい」という知識観はすぐにはピンと来ないけれど、時間が経つと、なにかわかったような、超越した感じがしてくる。「知識にこだわりすぎると、大事なことが見えなくなり、間違った理解をしてしまう」ということなのだろう。たくさんのことを知り、理解を深めたとしても、私たちは幸せになれない。自分自身でいることも、ありのままの自分を受け入れることも、微笑むことも、愛することもできない。ィク・ナット・ハンが言う通り、知識ができることには限界がある。

もっと知ることで理解してゆくのか、知ったことを捨てることで理解するのか。知ることと理解することについての考え方は、文化によって、そして人によって、大きく異なる。もちろん、どの考え方が正しいというものではない。

研究と発見

ガールスカウトをはじめ多くの場所で、「知る」と「理解する」は違うことと考えられている。でも「知る」と「理解する」は、分野によっては分けて考えることができない。例えば医学などでは、理解しなければ知ったことにならず、知ったということは理解したということと同じだと考えられている。

シャルル・ニコル（Charles Nicolle）は、なにかを発見するというのは、偶然でもなければ、運が良いのでもないという。偶然は、それを待っている人のところにしかやって来ない。そして運は、頑張っている人にしか向いてこないという。「見つけるということは、正しい知識がひとつ増えること」というニコルの明るい考え方は、今の人たちにはもうあまりない。

knowledge3.indd 43 2017/04/07 21:09:48

そのニコルが１９３９年に医学生たちに行った感染症の講義録を読んでいて、ふたつのことに気がついた。ひとつは「私たちの知識（nos connaissances）」という言葉で表されるように、知識の共有をあたりまえのこととして捉えていること。もうひとつは医学が進歩し続け、知識が絶え間なく良くなっていくと信じていることだ。

新しい発見があると、瞬く間にそれが多くの医者たちの新しい知識になる。そしてその新しい知識が呼び水となって、新しい発見につながる。そう信じている人に、「知識の共有なんて幻想でしかない」などと軽々しく言うことはできない。

ウィルフレッド・トロッター（Wilfred Trotter）は、知識は、私たちの周りで起きていることのなかの、似ていることに気付くこと、そして繰り返し起こることに気付くことからやってくるという。その考え方は、「誰かの発見を誰かの論文で読めば、それが知識になる」というものとは、大きく異なる。

シオボールド・スミス（Theobald Smith）は、「研究のために暮しのすべてを放棄して暮らしている人たちには、発見は突然やってくる。それは冒険のようでなくてはならず、論理的な思考の積み重ねの結果として来るべきではない」と言う。長時間の鋭い考えを積み重ねていくことはできるけれど、それは必ずしも発見につながらない。研究者たちは、発見がどのような方向から来ようと、それに準備ができていなければならない。そしてなによりも、その場にいなければならないという。

ウィリアム・ベヴァリッジ（William Ian Beardmore Beveridge）は、成功する科学者の多くはとても広い興味を持っていると言う。独創性というものは様々な知識から導かれるとも言う。誰も関連付けたことのないアイデアを関連付けるのが独創性だとすれば、それを持つには、広い範囲の知らないことを新鮮に感じる好奇心と、まったく関係のないことと考えられていることを結び付ける想像力とが必要になる。

knowledge3.indd 44 2017/04/07 21:09:48

自分の分野以外のことをすべて知ろうとして、論文をかたっぱしから読もうとしても、そんなことは絶対にできない。サマリーやレビューに目を通すだけでも大変だ。でもそれをしなければ、視野はどんどん狭くなり、専門バカと言われるようになってしまう。多くの研究者たちは教えるということに多くの時間を割くけれど、実は教えるということが研究者の視野を大きく広げているのだ。いずれにしても、研究者が本当の意味で第一線にとどまるというのは、思いのほか大変なことなのだ。

感知、概念、象徴

ジェームズ・ローリイ（James Lawley）とペニー・トンプキンス（Penny Tompkins）は、見えないものをどうやって獲得するかということを、そして感覚をどうやって作っていくかということを、感知、概念、象徴というキーワードを使って説明した。

感知：人は、見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わうという五感を通して、そして向き・動き・バランス・ポジションといった感覚によって、まわりの環境・物質の世界・人の行動・自分自身というようなことを知る。人はまた、過去のことを思い出すとき、または将来のことを想像するとき、その想像力で絵・音・感情を創り出す。

概念：すべての分類・比較・判断は人間の頭が作り出したもので、抽象的な概念でしかない。身近な人たちと暮らしていたとしても、誰も家族という概念に触れることはできない。概念は、物質を感知するような想像を働かせることでできる現実とは異なる系列で、経験が複雑に絡み合い、形のないものに名前を与えることで成立している。

knowledge3.indd 45 2017/04/07 21:09:48

・象徴：多くの哲学者・言語学者・認知科学者は、ほとんどの日常言語や思考は感覚でも概念でもなく、象徴でしかないという。象徴は、複雑な感情・行動・状況・抽象的な概念を、経験を伝える方法で、表現したり形を与えたりする。これを行うために象徴は、感覚的・物質的世界を利用し、そうすることで概念を抽象的に記述し、理解し、意味を持たせる。

なにがなんだかわからないが、見えないものとか、感覚とか、そういう話なので、仕方ない。抽象的なことを伝えるのは、知識を伝えるのに似て、大変難しい。そして、たとえ伝わったと思っても、なにも確かではない。

知ると考える

「自分で考えなさい」と先生が言い、生徒はなにも考えずに「自分で考える」とノートに書く。自分で考えることが良いのか悪いのかは考えず、先生が言ったから「そうしなきゃ」と思う。そこには、先生の言ったことを素直に聞くという姿勢はあっても、自分で考えるという態度は欠片もない。

では何事も自分で考えなければならないかというと、決してそんなことはない。考えてなんかいられないという状況は意外に多い。というか、生きていれば、考えてなんかいられないことばかりだ。考えて知るとか、理解して知るなどということは、そうはないのかもしれない。

実際私たちは、体験から多くのことを知る。戦場だったところに立てば、戦争の悲惨さを実感できる。川を泳いで渡れば、川の流れの速さを実感できる。考えて理解しても、実感はできない。体験し実感して知ったことと、考えて理解して知ったこととは、同じではない。同じではないが、どちらも頭のなかに残っていく。

knowledge3.indd 46 2017/04/07 21:09:48

そして問題は、考えることも理解することもなく、また体験し実感することもなく、知ってしまうことだ。学校の教室では、先生が前にいて、生徒は先生に向かって座っている。そういうあたりまえの状況は、いつ刷り込まれたのかわからないくらい、頭のなかで自明の理になっている。あたりまえと思えば、考えることもなく、することもなく、簡単に知ることができる。

考えることも、することもなく、知るというのは「目を使わずに見る」とか「耳を使わずに聞く」というのに似て、なにか宗教的な感じがする。15個の石が並べられているとされる石庭を前にして、どうしても13個の石しか目に入らないと言うと、それはあなたの心が曇っているからですと言われてしまう、あの感じ。聖典とか教義とか作法とかしきたりとか言われてしまい、ああそうかという、あの感じ。ただその通りに考え、その通りにするというのは、自分の否定ではないか。

自分というものを認め、目で見たり、耳で聞いたりするように、自分で考えたり、実感したりするほうが、ずっと自然ではないか。いいではないか。

考えることも理解することも実感することもなく、「学校でそう教わったから」「新聞にそう書いてあったから」「テレビでそう言っていたから」といって知識を仕入れ、それが役に立つからといって頭のなかをそんな知識でいっぱいにしたところで、むなしいし悲しい。確かに、教わったとおりに書けば試験で良い点が取れるし、周りの意見に合わせていれば生きやすいかもしれない。でもそれでは、生きたことにならない。

知識も経験も、ユニークなもの。どんな人の知識もどんな人の経験も、他の人の知識や他の人の経験とは違う、自分だけのもの。いとおしみ、いつくしむに限る。考えるという手間を省いて得た知識は、つまらない。

アンリ・ポアンカレ（Henri Poincaré）は「考えることがいかに大切か」ということを繰り返し書いた。「考えることは長い夜の闇のなかでの一筋の光だ」とか「考えることこそすべてだ」というような文章から、ポ

knowledge3.indd 47 2017/04/07 21:09:48

アンカレの考えることへの情熱がよく伝わってくる。

トーマス・ジェファーソン（Thomas Jefferson）は、私たち一人一人が持っている考える力のことを、アイデアという言葉を使ってうまく説明した。アイデアは人にあげたからといって減るものではない。受け取った側が光を与えられたからといって、与えた側が真っ暗になるわけではない。そしてアイデアは時間と共に消えていくわけでもないし、また尽きることがない。アイデアは分けなければ自分一人のものだが、共有すればみんなのものになる。アイデアを人と分かち合わないのは、もったいない。そういうジェファーソンの考えは、今の私たちの知識の共有という考えによく似ている。言葉の使い方や言い方が違っても、同じことなのだと思う。

考えることは、私たちに備わっている能力のうちで最も大事なものに思えてくる。その能力を使わずに生きていくのは、なんとももったいない。

考えると感じる

ルーク・バーンズムーア（Luke Barnesmoore）がパーソナリティとエゴとの違いを学際的な立場から書いていて、とても面白い。自分とはなにか、自分を認識するとはなにか。そんなことまで考えさせてくれる。「自分」はなぜか、地球上のありとあらゆるもののなかで、物理的に独立したものとして存在している。その個体の内が「自分」であり、外は自分ではない。厄介なことにその「自分」は、感じたり考えたりする。

パーソナリティは「自分」そのもの、自分自身。直感的に感じるという、私たちが動物として備えているもの。本能とか無意識という言葉が使われたりもするけれど、決してそんなものではない。心の静かな一瞬

knowledge3.indd 48 2017/04/07 21:09:48

の動きを、私たちの身体に備え付けられたセンサーのようなものが一瞬のうちに察知し、自分にいいかどうかを見極めてしまう。そんなもの。自分のことは自分が一番よく知っているというが、その知っているということは、私たちに備わっているもののなかで特に大切なものなのではないか。

エゴも「自分」だけれど、自己というか自我というか、なんだか主張していて、せつない。パーソナリティの感じるというとは違い、脳が意識的に考えている。だから脳に入り込んだもの、つまり経験したり学んだりして積み重なってきたものが、大きく影響する。エゴはだから、本来の自分とは違い、周りの影響を受けて脳のなかで出来上がったものだともいえる。

感じることは、論理的ではないようでいて、じつは論理的なのかもしれない。私たちの身体のなかのセンサーは思いのほか良くできていて、それがきちんと働いて判断を下すのであれば、それが論理的でないわけがない。

一方、考えることは、論理的に見えて、じつは非論理的なのかもしれない。私たちひとりひとりが論理的に考えていたとしても、周りから大きく影響を受け、周りと同じように考えることで論理を否定している。

ルーク・バーンズムーアの文章は、感じることと考えることの違いを明確にする。私はそれに引き込まれ、と同時に違和感を覚える。なにかが違う。

そもそも自分と自分以外、個人と集団というような考え方自体、西洋の考え方ではないか。そして心と身体を分けて考えるのも西洋のやり方ではないか。私たちはなにも西洋を真似て、そんなふうに考えなくてもいいのではないか。

感じることも考えることも、明確に分けたり意識したりする必要はないのかもしれない。

knowledge3.indd 49 2017/04/07 21:09:48

知識と嘘と想像力

いかにもＭＢＡを持ってますみたいなコンサルタントが来ただけで、「あー、いやだなあ」と思ってしまう人は意外に多い。話のはしばしに最新のジャルゴンがちりばめられ、感じの悪いことこの上ない。

リンダ・ナイマン（Linda Naiman）の『21世紀のための全能思考（Whole-Brain thinking for the 21st Century）』は、そんなＭＢＡのにおいがするプレゼンテーションだ。「論理的な左脳」と「直感的な右脳」とのバランスをどう取るかが、ビジネスの成功の鍵になる。「目的志向（goals driven）の分析的知能（analytical intelligence）」や「結果志向（results driven）のオペレーショナル知能（operational intelligence）」というような左脳の働きと、「ヴィジョン志向（vision driven）の創造的知能（creative intelligence）」や「人間志向（people driven）のリレーショナル知能（relational intelligence）」というような右脳の働きとを、両方引き出していこう。そんな話が続くのだから、途中で嫌になること請け合いである。

そして、「左脳の知識（knowledge）だけでなく、右脳の想像力（imagination）も重要だ」とか、「左脳の行動（action）だけでなく、右脳の共感（empathy）も重要だ」などというメモを取っていると、そんなうさんくさい話にも共感を覚えたりする。不思議といえば不思議だ。でもそんなことが、本当にビジネスの役に立つのだろうか。

そう思っていたら、橘玲の「左脳の役割は、自分に都合のいい嘘をでっちあげることだ」という文章が目に入った。ナイマンの「論理的な左脳」とは大違いだが、無意識が捏造した気分のいい嘘は、「意識」というスクリーンに映し出されるという。意識は無意識が生み出す幻想なのだ。

橘は「効果的に相手を騙すには、自分もその嘘を信じること」と続ける。宗教の教祖が信者を惹きつけるには、自らが真っ先に洗脳されなければならない。社会的な動物である私たち人間は、上手に嘘をつくため

knowledge3.indd 50 2017/04/07 21:09:48

に知性を極端に発達させ、ついには高度な自己欺瞞の能力を身につけたのだという。

確かに、自分のビジネスの有効性や有益性という気分のいい嘘を、まず自分が信じ、そして顧客に信じさせれば、ビジネスは成功する。ナイマンの「全能思考」は、そうは間違っていないのかもしれない。

橘はさらに、「もしこの説明が正しいとしたら、暴力や戦争をなくすために理性や啓蒙に頼ったところでなんの意味もない。自己欺瞞は無意識のはたらきだから意識によって矯正することはできず、他人が欺瞞を指摘すればするほどかたくなになっていく」と書く。そして「自己欺瞞がやっかいなのは、知性の高いひとほどこの罠から逃れられなくなることだ。なぜなら、その恵まれた能力を駆使して現実を否定し、自分を騙すより巧妙な嘘を、無意識のうちに作りあげるからだ」と書いている。

紙の上に「欺瞞の被害者にならないためには、自分で感じ、自分で考えなければいけない」と書いてみて、私は「あれっ」と考え込んでしまった。無意識のうちに作りあげられた気分のいい嘘を、無意識のうちに信じてしまうのが、私ではないか。私は「うーん」とうなった。

ナイマンの「全能思考」のなかで繰り返し語られる想像力については、アルバート・アインシュタインもまた、その重要性を繰り返し強調している。「想像することができなければ、発見することなどできない」、そして「想像力は知識より重要だ」とさえ言ったという。

もう、なにがなんだかわからない。ナイマンと、橘と、アインシュタインを、うまく締めくくる方法はないものかと考えていたら、トマス・キーダ（Thomas Kida）の『ヒトは賢いからこそだまされる（Don't believe everything you think）』という本のことが浮かんだ。

キーダによれば私たちは、統計よりもお話のほうを好み、「なんで」よりも「そうですね」を求め、幸運や偶然に感謝せず、世の中の多くのことを誤解し、なんでも単純化し、間違った記憶を持ち続けるという。

knowledge3.indd　51　2017/04/07　21:09:48

そんな私たちがなにかを考えたとしても、たかが知れているのだ。
キーダの「人が考えるということはずいぶんといい加減なこと」というメッセージは、「人の知識なんて、所詮いい加減なもの」という考えにつながって行く。知識なんて、いい加減。そう考えると、なんだか楽な気分になってくる。

食べるより知りたい

「衣食足りて礼節を知る」というように、人はまず衣食住のような基本的な欲求を満たそうとすると考えられてきた。そのことを示すために、アブラハム・マズロー（Abraham Maslow）の5層のピラミッドが良く使われる。ピラミッドの一番下には、食べたいとか寝たいといった切実な欲求が置かれ、それが一番基本的なこととされる。そのすぐ上には、経済的に安定したい、健康を保ちたい、良い暮らしを維持したいといった持続的なことを願う欲求が置かれ、その上、つまり3番目の層には、人とのつながりとか、愛したい、愛されたいといった社会的な欲求が置かれている。下から4番目の層が認められたいという欲求で、そこには自分が自分自身を認めたいという欲求も含まれる。そして一番上の層が自分らしく生きたいという欲求だ。
マズローの5層のピラミッドによる説明は、とてもうまくできている。一番下の層の動物的な欲求から一番上の層の人間的な欲求まで、まあそうかなあ、そんなものだろうなあといった気分で読むことができる。5つの欲求のすべてを満たすと、神と出会う神秘体験をするとか、民主主義的な性格構造になるとか、善悪の判断の区別がつくようになるとか、アメリカ文化のなかにいない私にはなんだかなあという感じが付きまとうが、それでも5層のピラミッドによる説明はもっともらしい、

knowledge3.indd 52 2017/04/07 21:09:48

けれど現実は、少し違うような気がする。食べ物のない人が、携帯電話を欲しがるという現実があるのだ。食べ物よりも家族との会話を望む人を、マズローの5層のピラミッドは想定していない。満たされていない人のことについて、満たされている人がなにを言ったとしても、それは想像でしかない。満たされていない人のことは、満たされていない人にしかわからない。

違うということ

計見一雄が狂気について書いている。みんなの現実認識とのずれ、客観的な世界を認識する仕方のおかしさが狂気なのだという。誰の耳にも聞こえないのに、一人にだけに聞こえれば、幻聴だ、狂っている、ということになる。人と違うのは、おかしいことではない。にもかかわらず、違えば、おかしいと言われる。

幻覚の場合、音の有無が判断の根拠になる。聞こえるかどうかは測定すればすぐわかる。ところが、幻聴が聞こえているときの脳内活動は、外部から音が聞こえるときの脳内活動と、まったく同じなのだという。

原因となることが外にあるか内にあるかの違いはある。そうであっても、音が聞こえるという客観的な事実と、幻聴という本人内部だけで発生している認識とは、全く同じ。差異はない。困ったことに、どちらも実証可能なのだ。

幻覚の定義は「外部対象のない知覚」だという。診断にはこの定義で十分だが、肝心なことは外部対象のある知覚と区別できなくて当然だという事実で、病人はそれに困っているのだという。

計見一雄は、夢を見ている人の脳内活動も同じだという。だとすれば私たちはみんな、狂っているということになる。

knowledge3.indd 53 2017/04/07 21:09:48

さてここで、知識について考えてみる。計見一雄が書いたことを知識にあてはめたら、どうなるか。もし誰かの知識がみんなの現実認識とずれていて、客観的な世界を認識する仕方がおかしかったら、その人は狂気と言われるのだろうか。誰も考えないことを、一人だけが考えていれば、狂っているということになるのだろうか。人と違うことを考えれば、おかしいと言われるのだろうか。

塩野七生は「書物から得た知識も、現実とのつき合わせを経て、はじめて認識になりうる」と書いた。「認識とは、哲学的に言えば、理知によって事物の窮極をきわめることだが、普通に言えば、何が重要か、を理解することである」という。

現実がひとりひとり違えば、認識もひとりひとり違う。なにが重要かはひとりひとり違い、その理解もひとりひとり違う。

違うということは「いけないこと」ではない。違うからといって非難されたり、牢屋に入れられたり、追放されたりするのは、間違っている。違うということを「いけない」と言う人たちは、自分たちが間違っているとは思わない。あまりものを考えない人たちは多数に付き、自分たちは多数だから正しいと思う。そんな人たちが物事を決める民主主義がいいわけはない。

知識を深める

ノルウェー科学技術大学（Norwegian University of Science and Technology (NTNU)）は、知識の開発のための基礎を作りあげ、経済的・文化的・社会的価値を創造することを目指しているという。科学技術という専門の広さや深さだけではなく、学際的な専門知識を最大限に利用し、社会が直面している大規模で複雑

knowledge3.indd 54 2017/04/07 21:09:48

な課題に取り組んでいくともいう。

知識の開発というとなんだか難しそうだが、知識を深めるといえばわかりやすい。価値の創造といえば出来そうにないが、価値に気づき価値を高めるということなら、できるかもしれないと思うだろう。

知識なしに使う

化学製品は私たちの生活のなかに入り込み、私たちは意識せずに使っている。ところがそれがどうやって作られるのかは、作ることを仕事にしている人以外にとっては完全なブラックボックスだ。私たちの多くは、化学の知識などまったくなしに化学製品を使う。

「自動車を運転するのに、自動車がどのように製造されているのかを知る必要はない」というのに似て、「化学製品を使うのに、化学製品がどのように製造されているのかを知る必要はない」のだ。

知識がなくても、エンドユーザーになって、製品を使うことはできる。そういう時代が長く続いた。

そして今、知識がなくても、製造ができるようになった。工場にはマニュアルが用意され、マニュアルに従っていれば物を作ることができる。ある日、そのマニュアルを作っているのがコンピュータだと聞いて、私は大きくのけぞった。「なにか」を知っている人は、ひとりもいないのだ。物が機械によって作られ、その機械を作る機械がコンピュータによって作られ、製造に関するさまざまな知識を持っている人はもうひとりもいない。

そうなってみて、知識とはなにかということと、知識は必要かということが、疑問として私たちの前に横たわっている。ひとりひとりのなかにあった知識は、どこかに消えてしまった。

knowledge3.indd 55 2017/04/07 21:09:48

決断と行動

断固たる行動を取れる人がいる。人気のある政治家や独裁者と言われる人たちは、断固たる行動がその特徴だ。

人は躊躇するものだ。そして多くの状況において、断固たる行動を取ったりしない。躊躇する人のほうが人間らしく、私は好きだ。

自分で断固たる行動を取るだけでは満足できず、人に決断や行動を呼びかける人がいる。

国際通貨基金(International Monetary Fund (IMF))のクリスティーヌ・ラガルド(Christine Lagarde)は「持続的な成長のために断固たる行動を」と呼びかけ、「テロに対する連帯」を呼びかける。ＩＭＦのトップがなぜ「テロに対する連帯」を呼びかけるのかはわからないが、それをおかしいと思う人はほとんどいない。

人に断固たる行動を強いる人もいる。人としての罪は重い。特攻や自爆テロを命じたり、罪を犯さざるを得ない状況に人を追い込んだりして、それでいて正しいことをしたと信じている。そんな人があとで自殺したり刑務所に入ったりして、責任をとったつもりになっても、許されるものではない。

断固たる行動と聞くと、悪い人のことしか浮かんでこない。断固たる行動を取れる人のいないところで生きていたいものだ。

流行

エピステモロジー（epistemology）という知識を研究する学問分野がある。いろいろなことを言う人がいたり、翻訳があったりして、知識論（theory of knowledge）とも認識論とも呼ばれ、今日に至っている。「知

knowledge3.indd 56 2017/04/07 21:09:48

識とはなにか」というのは私がいちばん知りたいことだから、いろいろ読んでみたのだが、哲学のにおいがすればするほど、答えからは遠ざかって行く。知るとはどういうことか、知らないとはどういうことか。人はどれだけのことを知ることができるのか。知ることができないということはあるのか。エピステモロジーはなんの答えもくれない。

そんなエピステモロジーにも「はやりすたれ」があって、誰かが論文を発表したり本を出したりすれば、しばらくは「そのこと」が話題になる。もっとも次の論文や本が話題になると「そのこと」への関心は薄れ、「次のこと」ばかりが話題になる。そして時が経ち、「そのこと」も「次のこと」もあっという間に忘れ去られてしまう。

ビジネスの世界で、「知識の管理（knowledge management）」や「知識の共有（knowledge sharing）」を説く人たちがいる。「どんな組織でも、知識を管理し共有しないと、大変なことになる」と、わかったような、わからないようなことを言う。組織で働いている人たちが持っている暗黙知を形式知に変え、知識を共有しようというのだ。

組織内に素晴らしいものを作る人がいたとする。その道、数十年。熟練のなせる技。職人気質で、気むずかしい性格。口数は少ない。誰にでもできそうな仕事なので給料は安いのだが、その人以外にそんな素晴らしいものを作れる人はいない。そんな状況で組織が考えることは、「その人の知識を吸い上げ、その人がいなくなっても困らないようにしよう」、つまり知識の管理と共有だ。でも、そんなことがうまくいくわけがない。

ビジネスの世界では、夥しい数のジャルゴンが生まれ、そして消えてゆく。興味は変わり続け、「日本式の経営」を話題にする人はもうほとんどいない。「知識の管理」や「知識の共有」も10年前ほどは話題にな

knowledge3.indd　57　2017/04/07　21:09:48

らない。「ビッグデータ（big data）はもう古い、これからはＩｏＴ（Internet of Things）だ」と言っている人が、「ＩｏＴはもう古い、これからは」と言っている姿が目に浮かぶ。

退屈な会議に「最新のビジネス用語の一覧表」を持って行って、出席者の誰かがその表に載っている用語を口にしたら、リスト上のその言葉を赤い線で消すという遊びをやったことがある。10分もしないうちに表は赤い線でいっぱいになり、「まあみんな、よく勉強しているな」と変な感心をしてしまった。

知識という言葉は、学問の世界で使われ、ビジネスの世界で使われ、その度に意味を変えてゆく。言葉の意味が変わってゆくのはまだいい。インターネットが普及し、人工知能（ＡＩ）の開発が進んで、知識そのものの意味が変わってゆく。１００年後に知識がどうなっているのかは、誰にもわからない。

好みは知識か

好みは、どんな知識を持つかということに大きな影響を与える。自分の好みを知るということは、煎じ詰めれば自分を知るということだから、自分の知識が自分の好みに依るのは自然のことだろう。

好みを知るには、好みでないものもたくさん知らなければならない。たくさん知ったなかで、いちばん自分に合ったものが自分の好みということになる。なにも知らなければ、好みもなにもあったものではない。

でも実際には、はじめて出会ったワインが自分の好みのワインになり、はじめて出会った映画が自分の好みの映画になるというようなことが起きる。はじめてというのは、とても強いインパクトを持つ。

はじめて出会ったものが自分の好みになる場合、そこに知識の蓄積はない。自分の好みを知ろうとするなかで、そして自分を知ろうとするなかで、出会うこと、知ることは多い。

knowledge3.indd 58 2017/04/07 21:09:49

好みも好みでないものも、良いことも悪いことも、すべてが知識になってゆく。そしてその豊かな知識が、好みを際立たせる。

専門知識のほとんどが、あっという間に陳腐化してしまう。だからといって、使えなくなった知識がすべて無駄なわけではない。

出会ったもののほとんどが、好みにはならない。だからといって、好みにならなかったものの知識がすべて忘れ去られるわけではない。

知識は豊かなほうがいい。

知識が意見にならない場合

意見は、その人の知識が言葉となって現れたもの。そう考えれば、「その人の知識の質が、意見を決める」ということになる。でも「知識の量が多いのに、意見がない」ということもありうる。そしてそれは、ちっともおかしなことではない。

まず、知識が客観的なため、「自分の意見など、なにもない」という場合がある。「1＋1＝2」という知識に、意見の持ちようがない。「南極は寒い」という知識に、どんな意見を持てと言うのか。事実に対して意見を持つのは、そう簡単ではない。

次に、知識が言葉にならない、もしくは言葉になりにくい場合もある。伝統工芸の技とか知識とかのように、そもそも言葉になりにくいものに対して、意見を言うなどというのは、はばかられるのではないか。

また、知識が多すぎて意見が持てないということもある。「ある視点から見れば正しいことも、別の視点

knowledge3.indd　59　2017/04/07　21:09:49

からみれば間違っている」とか、「ある視点から見れば良いことも、別の視点からみれば悪い」ということはざらにある。知識が多ければ多いほど、意見は持てなくなる。

教育現場では「自分のはっきりした意見を持ちなさい」などというが、意見を持てない場合は意外と多い。短絡的に白黒をはっきりとつけるような人ならはっきりとした意見を持つことができるだろうが、普通の人が自分の知らないことについて意見を求められるのはつらい。

人は、なにごとについてもあまりよく知らない。だから意見など、軽々しく言うものではない。

そして誰の意見を信じる場合でも、信じる側が責任を負うこと。それを忘れてはならない。さもないと、騙されたということになる。騙す人はもちろん悪いが、騙される人も悪い。信じてはいけない人を信じたり、信じてはいけない意見を信じたりするのは、なによりもいけないことだ。

knowledge3.indd 60 2017/04/07 21:09:49